

令和7年度 出雲養護学校 校内研究まとめ
 (1か年研究)
**【研究テーマ】持続可能な探究的な学びの実現
 ～地域と連携した取組を通して～**

I 本年度の研究について

1 研究の背景

学習指導要領では、「予測が困難で複雑で変化の激しい社会において、人生を主体的に切り開くための資質・能力を育成すること」が目指されている。そのために本校では、“学んだことを活用して自分なりの答えを見つけていく学び方”を具体化するものとして「探究」をキーワードに掲げ、探究的な学習過程（以下、「探究的な学び」と表す。）を意識した授業づくりを行っている。また、本校はグランドデザインに基づき地域との連携を進めてきた学校でもある。その2つの視点から、地域とつながりをもちながら児童生徒の「探究」する姿を引き出す授業づくりを目指して、令和5年度からの2カ年の校内研究に取り組んできた。

2年間の校内研究の取組を通して、“出雲養護学校の児童生徒の「探究」とは”という問いに全校の教職員で挑戦した。1年次の取組から見えてきた授業づくりの方向性を探究的な学びの6つの視点（図1）として整理し、2年次に共通理解して授業づくりをしたことで「出雲養護学校の児童生徒の探究」が少しずつ具体化してきた。「自分なりの答えを見つける」という新しい学び方の難しさと楽しさを校内研究の取組を通して教職員が経験することができた2年間であった。

そして、本年度はこの2年間の成果が研究のための研究で終わるのではなく、児童生徒の探究的な学びがこれからも持続していけるようにと考えた。そのためには、授業実践の充実に加えて、どのような点を整理したらよいのかという、カリキュラム・マネジメントの課題にせまる取組が必要と考え、1か年計画で実践に取り組むことにした。



図1 探究的な学びの6つの視点

2 本年度の研究の目的

「地域」×「探究的な学びの6つの視点」の授業づくりが〇〇とつながり、カリキュラム・マネジメント上の課題の改善につなげる。

日々の授業を展開していくことは、2年間の研究成果として実績や積み重ねがある。これを何とつなげていったら、どんな仕組みとつないだら、今後も持続可能な学びとして稼働していくのかを考えていくことを目的として、図2を用いて教師で共通理解をした。

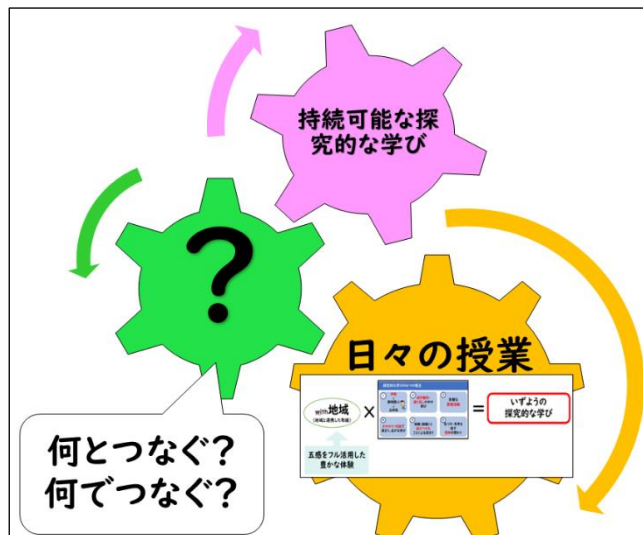


図2 研究の目的イメージ

3 研究の内容

- 『いずようの探究的な学び』の公式（図3）で授業づくりを実践する。
- 〇〇とつなぎ、年間指導計画や全体計画等を検討する。

4 研究グループ（全9グループ）

本校各学部、肢体不自由部門、寄宿舎、各分教室

5 研究のスケジュール

4月		10月	授業づくり②
5月	研究職員会	11月	
6月	授業づくり①	12月	研究のまとめ
7月		1月	
8月		2月	研究報告会
9月	研究中間報告会	3月	

6 研究のためのツール

- 令和5年度の研究成果として「探究的な学

びの6つの視点」がある。令和6年度には、地域と連携した教材と、6つの視点をかけ合わせることを『いずようの探究的な学び』と定義づけて授業づくりに取り組んだ。今年度においても授業づくりの公式(図3)として、全校で共通理解をはかり、授業づくりに取り組んだ。

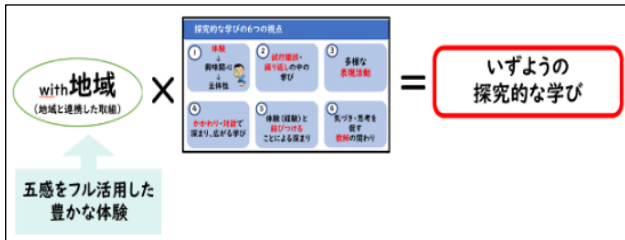


図3 『いずようの探究的な学び』の公式

(2) 各グループで研究テーマに沿った授業づくりができるように全校で共通の様式として持続可能な探究シート(以下、探究シート)を作成した(図4)。特に「2 本年度の研究目的」で示した「〇〇」の部分については、各研究グループによって課題が違ふ。そのため日々の授業実践(探究的な学び)を何とつなげたら、研究グループでこれからも授業実践が継続していくかを考えられるようにした。つまり、カリキュラム・マネジメント上の課題が解決に向かうポイントになり、それを各研究グループで示して、実践に取り組んだ。

図4 持続可能な探究シート

II 令和7年度の実践

1 『いずようの探究的な学び』の公式で授業づくり

授業づくりにあたり、探究シート前半部分を活用して、授業づくりを行った。取組の一部については以下の通りである。

	地域	6つの視点	探究的な学びの姿
小学部	秋の飾りを作ろう 他	④	試行錯誤しながら作品づくりに没頭したりする。
中学部	米作りをしよう 他	①②③ ④⑤⑥	・ 昨年の経験を活かす。 ・ 活動の中から自分なりの疑問をもつ。
高等部	出雲ブランドを極めよう 他	②④	自分が課題解決に向けてできることを行動に移す。
寄宿舎	モルック体験会	②	自分の得手不得手について必要な手立てを考え、やりがいを感じ活動できる
肢体G	地域の音楽講師 他	①②③ ④⑤	視線、表情、身体の動きなどで表現をする。
みらい分	わたしたちの生活と海洋ゴミ 他	⑤⑥	ごみ問題に対する自分の思いを周りの人に伝える。
大田分	公共施設、店 他	④⑤	自分たちの地域に親しみをもとうとする。
雲南分	防災 他	④	できそうなことを考え、実践する。
適摩分	近隣高校、施設	⑤	反省をもとに活動を工夫したり、自信をもって取り組んだりできる。

2 〇〇とつなぐ

カリキュラム・マネジメントの課題について、探究的な学びが単年の実践ではなく、これからも持続可能になっていく未来を作っていくためには、各研究グループとして、どこにポイントを置いたら良いのかについて検討した。探究シートの後半部分を記録として使い、授業実践がカリキュラム・マネジメントの課題とつながっていることを意識できるようにした。各研究グループの「何とつなぐか」については、以下の通りである。

	何とつなぐか	授業とカリマネをつなぐ工夫
小学部	実態の幅の大きい集団の中で、「一人一人の実態に応じた学習活動」、「集団で学習する際の授業づくりの工夫」が課題であるため、一人一人のよさと授業をつなぐ。	・ 児童一人一人のよさを生かし、一人一人の探究的な学びの姿を考える。 ・ 探究的な学びの6つの視点のうち、特に「かかわり・対話で深まり、広がる学び」への手立てについて考え、実践する。
中学部	総合的な学習の時間と生活単元学習、各教科との学びをつなぐ(関連付ける)。	・ 総合的な学数の時間と生活単元学習(または各教科)とを合わせて年間計画を立てる。

		・学年部の教師で話し合い、関連できそうな部分、関連できそうな要素を考える。(教師アンケートの実施)
高等部	有効な支援方法、伴走の仕方などについて共有できる仕組みを用いて、学部部の教師同士をつなぐ。	・テーマと柱の整理をする。 ・探究コアの会を開き、各学年の取り組み状況、成果や課題等を共有し、修正、改善しながら実践を行う。 ・探究コアの会で今年度の取組を基に次年度からのカリキュラムを作成する。
寄宿舎	地域交流の学びを生活や次の交流に生かすことで、自分から人と関わろうとする姿につなげる。	・活動前に、話し合う内容や活動の予定を事前に伝える。 ・経験したことをもとに、自分から考える機会をふやす。 ・第三者からの気持ちや感想を積極的に伝えるように心がける。
肢体 G	地域の人材や物、場所をいかに有効活用していくかが課題であるため、地域との関わり(連携)と授業をつなげる。	・講師との活動の事前打ち合わせで、児童のねらいや活動の流れを相談する。 ・講師がまた来たいと思ってもらえるようにする。(フィードバック、負担軽減の工夫)
みらい分	複数の教科やこれまでの学習とつなげる。	・独自のカリマネ表の作成を通して、教科間のつながりを考えながら授業構成を考えた。 ・研究の日に、学部ごとに話し合いを行い、教科間の連携の仕方を提案し合った。
大田分	身近な地域(地域に出かける、地域の人・施設、地域との協力関係)と授業をつなぐ。	・児童や生徒の実態を踏まえ、他教科と関連させた単元計画を作成する。 ・地域での実際の体験を設定する。
雲南分	スキル(話し合いによって意見をまとめる力、情報の集め方のノウハウなど)を身に付けて主体的に学べるようにすることが課題であるため、探究的な学びを教科・領域等とつなげる。	探究活動を進めるにあたり生徒に付けたい3つの力 ・考えて自分の意見を言う力 ・調べることがわかって情報を集める力 ・スライド作りの基本的なスキルを共通理解して、取組を進めていく。
適摩分	これまで地域との学習をたくさんしてきたが、飽和状態になりつつあるため、これまでの学習を整理し、地域資源(人材)の整理やカリキュラム・マネジメントの視点で授業	・分教室内で事後に全員で振り返りを行い、次回に向けての改善点を話し合う。 ・分教室での振り返りをもとに、隣接している高校の担当者と振り返りを設定し、ねらいと交流学习について確認する。 ・昨年と今年との活動の様

	の見直しを行う。	子を比較しながら生徒に振り返りの機会を設ける。
--	----------	-------------------------

Ⅲ 成果

Ⅰ 『いずようの探究的な学び』の公式で授業づくりを通じた授業の充実

各研究グループで『いずようの探究的な学び』をめざした授業実践が数多く行われた。R6年度の実践と比較しても、より具体的な『いずようの探究的な学び』の姿が数多く見られた。

今年度の実践をする中で、探究的な学びの6つの視点の中から②試行錯誤・繰り返しの中の学び、④かかわり・対話で深まり広がる学び、⑤体験(経験)と結び付けることによる深まりを重点項目として選択をしている研究グループが多い傾向があることがわかる。ここでは、各研究グループから報告のあった授業実践の中から、視点②④⑤の代表的な児童生徒の学びの姿をまとめた。

視点② 試行錯誤・繰り返しの中の学び

【小学部3年生 生活単元学習】

単元名: 秋の飾りを作ろう/学校を飾ろう

授業の様子: 一つ一つの

パーツについて素材選びや置き方を自分で何度も試行錯誤しながら製作に没頭する児童、素材の音や動く様子をじっくり観察し、深める児童などそれぞれの素材と向き合う姿が見られた。



視点④ かかわり・対話で深まり広がる学び

【雲南分教室 総合的な探究の時間】

単元名: 地域のために自分たちにできることを考えよう

授業の様子: 実際に非常

食を試食し、非常食に様々な工夫がされていることに気づき、気付いたことの意味を出し合った。学校に不足している非常食についても調べ、実際に買いに行った際、話し合いながら様々な種類の非常食を買う姿が見られた。



視点⑤ 体験(経験)と結び付けることによる深まり

【肢体不自由グループ 自立活動】

単元名：音楽活動

授業の様子：地域の音楽講師を校外学習先に招き、いろいろな楽器の音や音楽を聴いたり、一緒に楽器に触れたりする体験をした。普段触れていない楽器に対して、児童は注目しやすかった。カホンに自分が動かした足が当たったことで音が出たことを褒められると、何度か足を動かして音を出した。因果関係への気づきの足掛かりになったのではないかと考える。



これらの実践から、本校においては児童生徒の思考が「体験や関わりの中で試行錯誤」しながら深まっていくことが、探究的な学び方を推進していく上で極めて重要なポイントであると考えていることがわかる。地域を授業の中に取り入れるだけでなく、どのような学び方を児童生徒にさせていくかという意図を教師がもつことが授業づくりでは大切であることを改めて確認できた。また、研究として計3年間の積み上げがあるため、教師の授業づくりスキルが向上したこと、児童生徒の探究している姿のイメージが年々明確にもてるようになったこと、地域活用の成功体験とノウハウがたまってきたことも成果として挙げておく。

2 ○○とつなぐ～カリキュラム・マネジメントの推進～

「II 令和7年度の実践 (2) ○○とつなぐ」の通り、各研究グループがカリキュラム・マネジメントの取組のポイントを示して、実践を行った。その傾向を整理すると「地域の開拓や精選」「各教科、合わせた指導との関係性」「個の実態の絡め方」「教師同士の連携システム」が本校にとってのキーワードとしてまとめることができる。このような点が探究的な学びを今後も継続していくための、学部や学校としてのカリキュラム・マネジメントの視点として大切であることがわかった。

実践の成果としては、まず、学部及び分教室の現状で、無理なく探究的な学び方が保障できるかという部分についてアイデアがでた。例えば、年度初めに、総合的な学習の時間の学部の目標を共通理解する会を設定し、学年段階における探究的な学び方を整理する仕組みを作るなどである。

次に、何回も何年も繰り返していく計画が実施できる仕組みの重要性の気づきがあった。年単位

で繰り返されることで、児童生徒にとっては探究的な学び方が加速し、地域への啓発の面でも有効であった。

また、特に総合的な学習の時間及び探究の時間で研究を進めたグループについては、教科との違いや関連について考える機会になった。グループによって独自のカリマネ表や相関図を用いて整理を行い、教科で学ぶことと総合的な学習の時間及び探究の時間で学ぶことの違いをしっかりと意識することに取り組んだ。この違いを混同しないことで、総合的な学習の時間及び探究の時間の計画を考えやすくなるという意見があった。

最後に、児童生徒一人一人の探究的な学びの姿とはなんだろうと考え、実現するための仕組みを求めることも、持続可能な視点として大切なことだとわかった。特別支援学校の教師として、探究的な学びにおいても一人一人の探究的な学びの姿は異なり、個別最適な学び方があるということを確認できた。探究的な学びにおける個別最適化については、今後さらに推進されると感じている。

IV 課題

1 授業づくり

教師の授業スキルは高まった一方で課題も出てきた。例えばビデオの活用、子ども同士の関わりの設定、待ち時間の工夫といった、もっと良い授業をしたいという教師の渴望がより多く出てきた。また、教師が思うタイムリーな時期に地域と関わることができる仕組みづくりのニーズもあがった。さらに、実態の幅がある学習集団においては、探究的な学び方の具体的な目標設定や支援の方策についても検討の余地を残している。

2 カリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントの課題については、成果の反面として気になる点が挙げられる。まず、学部、分教室として無理なく活動を計画したい、繰り返し設定をしたいという教師の思いはあるのだが、活動制限や学校行事、地域の都合等の影響もあり、なかなか学習計画通りに進めることは難しいという壁を感じる事が多くあった。また、教科と総合的な学習の時間及び総合的な探究の時間との違いや関連について考える機会にはなかったが、明確に違いや関連を実感しきれていないという課題を残している。さらに、教師の入れ替わりも激しい本校の実情の中で、学部等として、この取組を引継いだり、継続したりしていけるのかと

いうことについては、今後注視をしていく必要がある。

V 終わりに

これまでに取り組んできた『いずようの探究的な学び』が、これからも持続できるにはどうしたら良いかを、本校職員全員で考えた1年間であった。校内研究として探究的な学びを考える機会は、ひとまず終わりを迎える。しかし、児童生徒の探究的な学びは終わることはなく、今後はより一層、重要視されていくと考えられる。『いずようの探究的な学び』がこれからも続いていき、予測が困難で複雑で変化の激しい社会の中でも、明るく強く進んでいく子ども達が育っていく学校であることを願っている。

代表執筆者

島根県立出雲養護学校 杉谷哲朗

(令和8年3月)